

# レタスの安定生産に向けた取組

## ■ 管内レタス生産者 ■

(西讃農業改良普及センター 大矢啓三)

### ●対象の概要

管内のレタス生産量は、県全体の約80%を占め管内農業の基幹品目となっている。昭和35年の導入から始まり、およそ60年が経過しているため、ビッグベイン病など連作障害の影響がみられている。また、作業の分業化による規模拡大を推進するため、平成11年に豊南地区レタス部会が選別包装支援システムを導入した。

レタスの出荷期間は、10月から5月までの長期にわたり、主に水稻、葉ネギとの輪作体系がとられ、最近ではトンネルの2作目としてスイートコーンやブロッコリーの栽培も増加している。

主な出荷先は、春・秋レタスが中国圏や関西圏、冬レタスが関東圏となっている。

### ●課題を取り上げた理由

レタスの栽培面積は、高齢化などから減少傾向であったが、出荷調整などの作業支援や省力機械化体系の整備などによって、若い担い手や農業法人による規模拡大が進み、産地全体の面積はここ数年微増している。

一方で、従来の選別包装支援ラインでは、入荷量が急増する時期には処理能力を超えていたため、持ち込み数量の制限があり、収穫が遅れて重量が増した低品質のレタスの発生などの課題を抱えている。

また、出荷量は天候や病害虫の発生などに左右され変動が激しくなっている。特に、ビッグベイン病を初めとした病害や秋のヨトウムシ類の被害により歩留まり率が低下している。

そのため、普及センターでは関係機関と連携しながら、レタスを安定的に生産するための支援を行った。

表-1 管内レタスの栽培面積と出荷量

	H27	H28	H29	H30
栽培面積(ha)	580	588	591	593
出荷量(ケース/10a)	192	219	149	199

※面積は普及センター調べ、出荷量はJA香川県平均

### ●普及活動の経過

1 新たな選別包装支援ラインの開発・導入支援  
豊南地区レタス部会では若手生産者を中心にアンケート調査を行った結果、80%が包装支援作業を利用したいと回答し、66%が規模拡大の意向であった。この調査を基に支援ラインの増強を検討し、選別精度の向上やより安全安心なレタスを提供できるように、新たな支援ラインの開発を支援した。また、アンケートでの規模拡大志向者などに講習会や個別指導を通じて、積極的な利用を推進した。

2 実証ほを通じて新品種・新技術の推進

1) ビッグベイン病対策

ビッグベイン病に対しては、これまでに耐病性品種と薬剤処理を組み合わせた試験を行い、発生程度別の防除体系を推進してきた。しかし、厳寒期どりの耐病性品種には病気には強いが形状の乱れや葉先枯れが出やすいなど一長一短があるため、新品種を取り入れて継続した品種比較試験を行った。また、菌密度の高いほ場対策としては土壌消毒を推進してきたが、手間とコストがかかることから普及が低かった。そのため、効果はやや劣るものの比較的簡易に処理できる薬剤体系の試験を行った。

2) 排水対策

畝立て時の土壌水分が高い場合や、定植後の大雨により畝が冠水した場合には、定植の遅れや生育不良となり、病害の発生などから収量・品質の低下が見られている。

そのため、排水対策として①溝掘り機(明渠の設置)、②振動式サブソイラー(弾丸暗渠)、③パラソイラー(硬盤破碎)の3機種の実演会を行うとともに、実証ほを設け地表及び地下への排水性改善の取組みを推進した。

3) 生分解性マルチを利用した早期畝立て栽培の実証

ほ場条件の良いときに畝立てをして、適期に定植できるようにするため、定植予定の1か月前に畝立てを行った。また、片付けの省力化や処理経

費削減のために、数種類の生分解性マルチを用いて、それぞれの分解度を把握した。

### 3 競合産地との情報交換会

平成29年産レタスは低温による生産量の減少、30年産は単価安でここ数年レタス経営は厳しい状況となっている。そこで、今後のレタスを中心とした産地の取組みを検討するため、豊南及び三豊地区レタス部会の役員を中心に、同じ西南暖地の産地である兵庫県淡路島での調査研修と農業者との情報交換会を実施した。



淡路島での研修の様子

## ●普及活動の成果

1 処理能力の増強と安全・安心なレタスを！  
 新たな選別包装支援ラインでは、①処理能力の強化（3,200個/hr.→6,400個/hr.）、②選別精度の向上（画像による形状選別に重量計測による選別を追加）、③農産物の安全・安心確保（レタス包装フィルムに個別番号を印字、金属検出機能による金属異物混入防止）により、高品質で安全安心なレタスを出荷できるようになった。

また、今回の新施設の導入に伴い、旧施設の35名に加え、新たに21名の利用者が増加した。



新たな出荷調整ライン

### 2 ビッグベイン病対策の体系技術の普及

菌密度の高いほ場対策として、畝立て時にフルアジナムSCを散布し、定植時にチオファネートメチル水和剤のかん注を組み合わせると防除効果が高いことが確認できた。また、厳寒期の耐病性品種として「クラウドブレイク」（武蔵野種苗園）を有望品種として選定した。

これらの結果を講習会、個別指導などで周知することで、品種の選定や薬剤処理方法をほ場の発病程度に応じた取組みが定着してきた。また、「クラウドブレイク」が令和元年産の冬どり作型（1～3月収穫）において定植された品種のうち、4割近くまで栽培された。

表-2 「クラウドブレイク」の栽培面積

	H30年	R元年
冬レタス(1～3月)に占める割合(%)	31.6	39.6

### 3 排水対策効果確認と関連機械の普及

排水対策機械の実演会や実証ほの結果を講習会などで周知することで、溝掘り機や心土破碎機械の導入が進んだ。

表-3 排水対策関連機械の導入台数

	H30年	R元年
溝掘り機(台)	13	6
心土破碎機(台)	3	2

## ●今後の普及活動の課題

### 1 支援ラインを利用した付加価値化

天候の影響から出荷量の変動が大きく、数日間冷蔵庫で保管する事例が見られた。また、単価の安い時期には支援を利用しないで、自分で包装する生産者もいた。そのため、利用者全体で計画的な作付体系に取り組むとともに、品質を向上させることでレギュラー品との差別化を図る必要がある。

### 2 単収アップと経費削減による所得の向上

若手や大規模生産者では、規模拡大の反面、単収が低下している場合も見られる。レタス経営で儲けるためには、単収を最低でも250ケースまで向上させる必要がある。

また、新規栽培者にとってトンネル被覆関連の経費や労働時間は負担となるため、省力的な被覆方法などの検討が求められている。